

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

Documentation No.9

ドキュメンテーション



■ 新しい鼓動を感じて - 3回目の卒業生を送る -

ドキュメンテーション学会会長
学科主任

原田 智子 Tomoko Harada

寒い日が続いていましたが、晴れた日の陽射しはすっかり春めいて、梅林ではほのかな香りが春の訪れを感じさせてくれています。4年生は卒論の口頭試問も終わり、学生生活最後の春休みを楽しんでいることと思います。3年生は研究室の配属も決まり、就職活動と卒業論文のテーマを考える時期になっています。2月16日と17日には、恒例の学内企業説明会が開催され、熱心に説明を聞く3年生の姿をみかけました。昨年は、今までになく不況の影響が4年生を苦しめていました。なかなか思うように就職が決まらず、苦労した人も多かったようです。

ドキュメンテーション学科は設立から6年を経て、今年は3回目の卒業式を迎えました。パソコンを活用して、デジタル時代に対応できるさまざまな知識や技術を学びました。本学科で学修した内容は、どの仕事についても役立つ内容ばかりです。それらを社会での仕事に是非役立てていただきたいと思います。4年生の社会でのご活躍を期待しています。

今年は、バンクーバー冬季オリンピックが開催されました。百分の一秒を争うモーグル、スピードスケート、大回転などの競技があるかと思えば、チームワークとコミュニケーションが鍵を握るカーリングのようなミリ単位で頭脳と技術を競うもの、華麗な演技を楽しませてくれるフィギュアスケートなど、種目も多種多様です。しかし、参加する選手がメダルを目標に、練習に練習を重ねて努力してきたことは共通です。われわれの日々の生活でも、コツコツと目標に向かって努力することが重要で、時間を大切に最後まで精一杯努力することが成功への鍵といえるでしょう。

1年生から3年生は、今この時期に入学時の目標を思い出して、資格取得や身につけようと思った学習内容に向けて努力してみましょう。是非、いろいろなことにチャレンジしてください。4年生は、卒業後もドキュメンテーション学会の総会や懇親会などに参加して、社会人として後輩へのアドバイスをお願いします。教員一同、これからも皆さんを温かく見守っていきます。

卒業論文題目

平成 21 (2009) 年度

●原田智子研究室

私達が研究するテーマは図書館に関する調査・分析を中心に検索エンジンの比較や web 地図サイトについての研究など、様々な分野に及びます。研究室全体の空気はのんびりとしたものですが、研究生同士で意見交換を活発に行うなど日々充実した活動を行っていました。(仲戸川)

- 大山 誠仁 Yahoo!JAPAN と Google の検索機能と提供サービスに関する調査
- 小澤 香苗 Web 版地図の比較調査
- 金子 俊 鶴見大学図書館の Web サイトに関する調査と分析
- 小泉 心平 日本大百科全書のメディア別比較調査と分析
- 小島 寛史 J-STAGE と CiNii における電子ジャーナル提供サービスの比較研究
- 田中 由記 近代デジタルライブラリーと青空文庫の比較調査
- 仲戸川莉沙 国立大学図書館におけるデジタルレファレンスサービスの調査・分析
- 中村紗代香 情報検索応用能力試験 2 級問題の分析と出題傾向
- 古市 真美 公立図書館における指定管理者制度に関する調査



●堀川貴司研究室

私はおもに明治時代の書物の装丁と印刷方法の変化について調査しました。いつ頃、書物の装丁が和装本から西洋の製本・印刷技術を用いた洋装本に切り替わったのかに興味を持ったからです。しかし、いざ調査し始めると大量の図書をどう調査するかという問題に突き当たりました。堀川先生の助言を交えて考えた結果、その問題を解決したのはインターネットです。国立国会図書館の OPAC を利用すれば、検索した図書の装丁が分かるし、電子化されている画像で印刷方法も知ることができるからです。最初は本当に調査ができるか心配でしたが、やり方次第で調査ができると一つ勉強になりました。(森田)

- 森田 貴之 明治期教科書の形態的研究
- 渡辺はるか 岩松院所蔵の古典籍の研究

●長塚隆研究室

長塚教授のゼミでは、各々が自由な発想でテーマを定め、研究を進めていました。携帯電話、電子マネー、Web教材などに関わることまで個性豊かな内容を、活発な質疑応答などで刺激を与え、支え合い論文を作成していくことのできるゼミでした。(仙波)

- 相澤 紘一 オフィスソフト間の機能と 互換性についての比較研究
- 岩木 聡子 2ch 上でのマナーの改善
- 大村 侑里 動画共有サイトにおける違法動画をめぐる諸問題
- 小泉 直人 情報リテラシー教育のための Web 基礎問題集作成
- 小崎 裕美 情報リテラシーテキストの 補助教材の作成
- 佐藤 啓志 テレビの将来動向についての 分析調査
- 鳥山 英樹 検索エンジンで見る 不動産情報の特徴
- 藤代 健至 電子マネーの利用実態と課題
- 水野 大輔 野球の外野守備に関する Web 教材の作成
- 南 憲佑 携帯電話の期待される 機能についての実態調査



●伊倉史人研究室

私は、図書館の貴重書に捺されている蔵書印を調べて、写真に撮る作業をしました。そうして収集した蔵書印をパソコンに取り込んで、実際に古典籍の調査に活用できるような中身のあるデータベースの作成を目指しました。篆書が難しく、なかなか読めなかったり、印面がこすれていたりかけていたりしていて、読み取れないものも多くあり、苦労しました。伊倉先生の研究室には、Web上で貴重書のデジタル画像を公開する方法の研究をしている人もいました。(湯本)

- 杉本 昌通 古典籍のナビゲーションシステム
- 湯本優紀子 鶴見大学図書館所蔵貴重書の蔵書印の研究

◎岡田靖研究室

岡田ゼミの基本方針は、自分のことは自分です。個人がいかに努力するかが問われるゼミでした。卒業論文のテーマは学生が好きな事から見つけました。その好きな事とドキュメンテーション学科に関連付けたテーマを設定して卒業論文を製作しました。岡田先生は、卒業論文の書き方や資料の集め方、推敲、就職活動のアドバイスをしてくれて、「困った時に来い」といつも言ってくれました。努力して、躓いている学生に対しては助力してくれました。頑張っている生徒を応援してくれるのが、岡田ゼミの特徴でした。（平野）

- 帆足 大雅 書籍の画面における演出について
- 岩瀬 弘季 高校野球はデータ分析から
- 江藤 和樹 神奈川県内東海道五十三次宿場浮世絵と現在の比較：デジタル化映像による
- 照屋 翔一 有効なバットスイング：デジタル映像による分析
- 長谷部達也 漫画は図書として認められるか：アンケートを基に
- 平野 秀和 ライトノベルと文学作品の比較
- 細川 佳人 スポーツ選手における怪我について：その原因の分析
- 増田 有美 ライトノベルの普及と活字離れ・図書館離れについて
- 和田 晃 無死で四球または安打で出たランナーは得点になるのか：鶴見大学硬式野球部の場合



◎大矢一志研究室

私たちのゼミでは、毎回各自の問題を持ち寄って発表し、先生やメンバーからコメントやアドバイスをもらいました。少人数ならではの、内容の濃い話し合いをしました。けれども、徐々に発表の内容が専門的になってくるにつれ、他の人の研究内容が分からなくなってきました。私は、論文の組み立て方でつまづきました。読者に伝えたいことが多すぎて、何から伝えればよいのか悩みました。（上田）

- 大木奈々絵 漫画の符号化規則の研究 ―視線移動順序と描き文字―
- 上田 唯 衣服オブジェクトの特徴伝達の手法
- 前原 志帆 教育用プログラミング言語 Scratch を必須条件とする単元の開発
- 益子 優海 多様な電子ブックに対応した縦書き表示システムの開発

●元木章博研究室

元木研究室はネットワークや教材、妖怪データベース、漫画による影響など様々なテーマで卒業論文を書く学生が参加しました。元木研 Wiki という元木研関係者のサイトがあり、そこに各人の卒論ページがあります。また、今年度からは OBOG の皆さんも参加する元木研究室ソーシャルネットワーキングサービスの運用を始めました。先生の手厚いサポートがありますが、14名と大人数なのでそれぞれの自主性が求められました。(北村)

- 阿左美美穂 青少年におけるマンガの影響と、その効果の可能性
 市村 希 セキュリティ教育における擬似体験学習教材の開発と評価
 遠藤 秀一 情報機器教育論における動画を使用した復習用教材の開発と評価
 亀岡 里紗 調べ学習における情報メディアの評価と課題
 北村 亮 研究室活動における SNS による人的ネットワーク形成の促進と現状把握
 久保田亮子 元木研究室における蔵書検索・貸借システム (MOPAC) の構築と運用—貸借機能の実装を中心に—
 佐久間 大 マンガレポートから見たコミックマーケットが抱える問題点と参加者意識向上への考察
 白倉 弘崇 時代背景から見たテレビ連続人形劇のあり方
 園部 景子 携帯電話利用におけるフィルタリングソフトの現状把握と指導提案
 中村 妃紗 元木研究室における蔵書検索・貸借システム (MOPAC) の構築と運用—携帯電話からの利用を中心に—
 長嶋のぞみ 全国の公共図書館における Web アクセシビリティの調査と評価
 行田 政道 日本語形態素解析における専門用語辞書作成と配布に関する問題—図書館情報学向け辞書作成の試行—
 吉村みなみ 日本に伝わる妖怪の調査とデータベースシステムの構築



印象に残った授業

中島 史織 (写真上・左)

Shiori Nakashima

2年生になり受けた授業で印象に残ったのは、プレゼンテーション演習と古典籍読解演習です。

プレゼンテーション演習は、2クラスあるうちの、4年生が多く履修しているクラスに入っていたので、いろいろと勉強になりました。4年生ともなると、さすがに皆さん、プレゼンテーションが上手で、ときどき担当の先生が見せてくれる、もう一方のクラスの、同級生が作ったスライドとは歴然とした差がありました。話し方も上手でした。2年生中心のクラスでは、指示を守らずにスライドを作成する学生が多いらしく、先生がこっそりと「こまっちゃう」ともらしていたのが、おかしかったです。パワーポイントの扱いにも慣れ、人前で発表する度胸もつき、とても役立つ授業でした。

古典籍読解演習は、くずし字を読む不思議な授業でした。こんなに、今となっては使われていない仮名があって、昔の人はこれを全部区別できていたのだろうかという疑問でした。ほとんど暗号を解読している気分で、読めるようになるとけっこう楽しいです。

コース選択は、司書資格の取得は考えていないので、図書館学コース以外かなというくらいで、まだあまり深く考えていません。けれども、今年は可能な限りすべての書誌学の授業を履修しましたし、1年生の時にも書誌学関連の授業を取ったので、なんとなく今は書誌学コースに進むのかな、という気がしています。



2年生・専門科目の授業／クラブ活動

学生の



先輩になって

川松 亜美 (写真下・左)

Tsugumi Kawamatsu

大学に入学してあっという間に1年半が経ちました。はじめは大学の授業についていけるか心配でしたが、なんとかついていくことができました。1年生の時の授業内容は基礎などが多かったことに比べて、2年生になると専門的な授業も増えて内容が難しくなってきました。授業も1年生の時は必修が多く専門選択が少なかったのに対し、2年生ではコース選択を意識した選択科目が増えてよりコースごとの専門科目が増えてきています。去年は大学生活に慣れることに精一杯でしたが、今年は課題提出も増えてきたので今まで以上に図書館を利用し、空き時間に学習する習慣をつけていきたいと思います。

コース選択については図書館学コースか、情報学コースかで迷っています。これから自分が将来やりたい事や今まで受けた授業の内容を考えたり、先輩のアドバイスを受けたりしながら決めたいと思います。

私は弓道部に所属しています。弓道は大学から始めたので、最初は分からないことも多く、仕事を覚えるのも大変でした。今は2年生になり1年生に仕事を教える側になって改めて先輩の大変さが分かりました。目上の人との接し方も学べ、社会に出るための練習期間のようでもとても為になっています。試合シーズンになると毎週のように試合があったりして大変ですが、今後も部活と勉強を両立出来るように、頑張っていきたいです。

生徒からみた授業 4年 益子 優海 Yuumi Mashiko

教育実習体験記

生徒の立場になって、どのように授業をしたら良いかを考える。ということの意味を学んだ。実習中、特にそう考えさせられた出来事が二つある。

最初の授業実習で、目の前の生徒が「めんどくせー」と言うのを聞いた。すると、隣に立っていた指導教諭から「気にしないでいい」と言われ、はっとした。私は全く気にしていなかったのだ。生徒が面倒くさがる気持ちが分かり、当たり前を受け止めていたのだけれど、「先生」としては、気にしなければならぬのだと感じた。私が「生徒のまま」で授業をしていたことが分かったことが、まず一つ。

もう一つは、理想を叶える難しさを実感した時だ。

私は高校生の頃、先生と同じことを何度も繰り返し指示されることが苦痛だった。未だに覚えているのが、「教科書 38 ページを開いて下さい。38 ページですよ、38 ページ。開いてますか？ 38 ページ」という現代文の先生の指示である。もちろん、教科書を開いていない人や話を聞いていない人へ向けての「繰り返し」だというのは当時も理解していたけれど、それでも、その授業の仕方が好きではなかった。そう感じたままこれまでで、私は同じことは言いたくない、という思いを持って教育実習に臨んだ。

そして、最初の授業実習後の反省会。教科指導の先生から「一度説明したっきりになっている」と指摘された。一度の説明では全ての生徒に行き渡らないのだから、何度も繰り返す必要がある、と言われたのだ。もっと生徒の立場になって考えるよう教えられ、そうしていたつもりだった私は、その時点で理想通りにいかない歯痒さを味わった。

それから、他の先生方の授業を見学させて頂き、繰り返し回数はやり方次第で少なくできることに気づけた。実際に、作業手順を一覧にしてモニターに映しておくだけでも、再度説明を求める生徒の数がずいぶん減った。

実習に行くまでは、「生徒として」生徒から見た授業を考えていたが、「先生として」生徒から見た授業を考えるということが、本当の意味での、生徒の立場にたった授業だということ学んだ。

マークアップ言語のグリーンナ

Gleaners of Markup Languages

大矢一志
Kazushi Ohya

No.5 要素と属性

不思議なもので、ひとは自由を求めると混乱が生まれ統制を求めますが、統制がきつくなると自由を求め始めます。XML では、統制をきつくするのであれば、スキームを定義して valid(妥当な)文書を作ることができますし、自由にしたいのであれば、well-formed(整形形式)文書を作ることができます。ところが、XML では昔から、自由すぎることに多くの人が戸惑いを覚えた点がありました。その1つが、今回紹介する「要素」と「属性」の選択です。

ある情報を「要素」に書くのか、それとも「属性」に書くべきなのか、という判断は、マークアップ言語を使うときに感じられてきた古くて新しい問題です(興味がある方は <http://xml.coverpages.org/elementsAndAttrs.html> をどうぞ)。簡単に言えば、如何様にも書ける、というのは本当なのだろうか、という疑問です。例えば、タモリさんの名前のマークアップデータを作ってみましょう。

```
<name alias="タモリ">森田一義</name>
```

また、次のようにも書けます。

```
<name>
<real>森田一義</real>
<alias>タモリ</alias>
</name>
```

この2つの違いは、芸名を属性値として書くか、それとも要素の内容として書くかです。ここで(初めてですが)属性の書き方(いわゆる文法)を確認しておきましょう。これは、高校で習う HTML の属性と同じ文法です。

```
「属性」=「属性名」'= ''「属性値」''
```

例えば、HTML でリンクを張る場合には

```
<a href="http://www.google.com/ncr">Google 検索 (スッキリメニュー)</a>
```

と書き、属性名が「href」属性値が「http://www.google.com/ncr」になります。ところで、属性の書き方のルールはこれだけでしょうか。実は、もう少し複雑な決まりがあります。例えば、

- 属性値には、属性や要素は取れない(子要素は書けない)、
- 属性には、(名前にも値にも)順番がない、
- 属性値に書かれている内容は、要素と関連すると解釈されることが前提とされている、

という決まりがあります。

c)には少し説明が必要です。これを正確に言えば、属性間の対応関係をとる方法がない、けれども属性は必ず要素に付加される、従って属性値の内容は要素と関連すると解釈するのが自然である、ということです。ちょっと難しいかもしれませんが、ここで立ち止まらずに、もう少し話を先に進めてみます。先の決まり a,b,c から、次のことが同時にわかります。

- 下位構造を持たないものが属性になる
- 順序付きの情報は属性として書けない、
- 属性に関する属性は書けない、

すると、例えば、読み仮名を振るために、

```
<name yomi=" もりたかずよし " alias=" タモリ yomi=' たもり ' ">
  森田一義 </name>
```

としてみると、これは a) に抵触するので、不適切といえます。

また、新しい例ですが、

```
<名科白 en="Chow comes first, morality second"
  de="Erst kommt das Fressen, dann kommt die Moral">
  まず飯(メシ)だ、モラルはそれからだ。
</名科白>
```

という書き方も、一見良さそうですが、実はよくありません。これは、c) に抵触しています。日本語、英語、ドイツ語の翻訳を並べて、みな同じ内容を示しているように思われるかもしれませんが、残念ながらそうはなりません。この書き方には、1) 各言語間の関係が見えない、2) 各言語が示す意味モデルは、必ずしも同じではない、3) 元はドイツ語で書かれているという情報が得られない、という問題があるのです。ここから、翻訳の対象となりうるテキストは属性には書けない、というルールを、新たに見つけることができます。

このように、細かい制約をひとつひとつクリアしてゆくと、タモリさんの名前は、例えば、次のように書くことができます。

```
<name>
  <real yomi=" もりたかずよし ">
    <yomi xml:lang="jan-Latn-x-kunrei">
      <surname>morita</surname>
      <givenName>kazuyosi</givenName>
    </yomi>
    <norm xml:lang="ja-Jpan">
      <surname yomi=" もりた ">森田</surname>
      <givenName yomi=" かずよし ">一義</givenName>
    </norm>
  </real>
  <alias yomi=" たもり ">タモリ</alias>
</name>
```

いったい、これは何をしているのでしょうか。こんなにも複雑で、読みにくい書き方をする理由があるのでしょうか。実はこれが正に、要素に書くべきなのか、属性に書くべきなのかという判断を難しくしている背景になっています。つまり、1) 自由に書いても良いが、そうすると 2) 理屈に合わない部分が生まれてくる、しかしすべてを理屈通りに書こうとすると、3) とても複雑な書き方となり、ひとにも機械にも優しくないデータになってしまう、となるのです。

ここまで来ると「マークアップ言語は何を難しいことを考えているのだ、何故もっと簡単に考えられないのか」という疑問が生まれてくるでしょう。それは、健全な感覚だと思います。実は、マークアップ言語は、プログラミング言語と同様、理論的な面と、実用的な面の、2つの論議が同時に行われ易いトピックなのです。ここまでの論議は、本当は、XMLの定義とXMLの使い方の、2つの側面を分けて論じる必要がありました。XMLはとても単純なルールで書けるマークアップ言語なのですが、そのルールが単純であるが故に、その制約が見えにくくなっていったのです。そこに、実用的か、という価値観も加わり、様々な視点からいろいろな書き方が論じられてくるのです。この古くて新しい問題には「理論の話をしているのか、実用的な話をしているのか」をよく見極めて、自分なりのスキームを作る姿勢が有効な対処法となります。この時にキーワードとなるのは「アーキテクチャ」という言葉です。これについてはまた別の機会にしましょう。要素か属性かという判断は、一見簡単な問題に見えますが、その判断には知識と経験を必要とする、応用問題だったのです。

可能性を伸ばす

私には、入学当初、色々心配ごとがありました。友達ができるか、勉強についていけるか、なにより毎日きちんと通えるのか。楽しみよりも不安で緊張が解けませんでした。しかし、せっかく大学に通えるのならば、楽しい青春を送りたいと決意し、笑顔を心がけて積極的に前へ前へと進んでいくと、私の心配ごとは瞬く間に縮んでいきました。

私の周りには大学らしく個性あふれる友人や教員の方々がいます。

始めは周りの人たちの豊富な雑学についていくのが難しく、理解をするのに時間がかかりましたが、慣れてみると深くのめり込むことのできる興味深い内容が多くあります。今まででは想像もつかない世界や視点がまだまだ多く存在していることがわかりました。

授業も、内容は個人の好みの授業を選び、専門的知識が豊富な教員と、自ら選択した授業に集中している学生が集まるので、確実に関心を持てます。細かく説明を行う授業から、学生に質問や実践をさせることを主とする授業、理解や考えなど確実な答えがない授業まで様々な形式があります。

今は、興味深い授業の課題に丸1日以上かけて納得するまで試行錯誤をし、そこから発展して他の知識に取り組むことや、教員に質問をして疑問点を無くしていくなど、自ら学習に励むことがとても楽しいです。

私の大学生活の朝は、服装を決めることから始めます。雰囲気の違いの違う服を着ても自分らしい服装にできるかという試みをはじめとして、朝気合いを入れるのにも最適です。

前期を終えて、可能性はどこからでも引き伸ばせることがわかりました。大学生活を通し、一つでも可能性があるならば、自分の納得するまで可能性を伸ばし、多くのことに挑戦したいと考えています。まずは学校掲示板の作品応募ポスターや図書館の本を吟味して、知識や経験を増やす努力を欠かさないようにしたいです。

松尾 由梨乃
Yurino Mtsuo

不安は杞憂に

鶴見大学に入学してから早くも前期が終わろうとしています。この間、様々な悩み事がありましたが、いざ乗り越えてみると「存外何とかなるものなのだなあ」という気持ちが芽生えました。

私は4年制夜間学校、所謂定時制高校の出身で、この大学に入る上で幾つもの不安がありました。夜型生活が基本だったのに、それを朝型に矯正する事は可能なのか。40分だった授業が倍以上の90分となりついていけるのか。年齢の違う人々と上手くやれるのか。そもそも大学に通い続ける事は出来るのか…。他者から見れば些事としか言えない心配を延々としていました。

それらの思いは、私の取り越し苦労に終わったようです。確かに朝中心の生活にシフトするのは大変で、疲労からか授業の最中睡魔に襲われる事はありますが、日々を繰り返す事で漸く軌道に乗り始めたようです。授業時間も初めこそは辛く、今も些か長いとは感じますが、慣れてしまえば意外と耐えられます。そして、人付き合いに関しても、そもそも大学なる場所で歳を気にしていた事自体が間違いでした。誠意を込めて接すれば、相手もそれに応えてくれる。その様な基本的な事を失念していたようです。

総じて、私の不安は杞憂で済みそうです。慣れさえすればどうにでもなる。それがこの数ヶ月間での私の実感です。名称や場所は違えど同じ学び舎。何とかなるものです。未だに思い悩む事はありますが、この大学に棲む愛らしくも微笑ましい猫達の姿行動に癒し和まされながら、日々を励み、通い続ける事が出来そうです。

宮内 隆太郎
Ryutaro Mlyauchi

大学へ行く楽しみ

入学して4ヶ月が過ぎましたが私はまだまだ大学生活に慣れません。入学して最初の試験を終えたばかりですが不完全燃焼といってしまうか、もっと勉強しておけばよかったなどと後悔先に立たず…

試験結果を知るのが怖いですが、前期の講義が全て終わり夏休みに入った今は、大学で新しくできた友人と出かけた部活動の合宿に参加したりすることの方が楽しみです。他にも、普段は時間があまりなくて構うことが出来ない大学の周りに住み着いている猫たちと夏休みは存分に遊ぶことが出来るので…猫マップでも作ってみようと思います。誰得…無論、私が喜ぶだけなのですが。

猫嫌いの方は辛いかもしれませんが、この大学の周りには本当に猫が多いので（私が確認しているだけで10匹は超えています）猫好きの私はその事実を知ったとき、癒しの空間がここに！と思うくらいでした。晴れた朝なら大抵の場合参道の入り口で猫たちがお出迎えをしてくれるので、登校するのが楽しみです。

また、猫たちと遊んでいると参拝者の方や散歩に来た人たちに話しかけられることがあります。一瞬の出会いですが、そこで始まる猫談議がとても心を和ませてくれるので、私の大学生活には猫たちの存在が欠かせないものになっています。

須賀 しおり

Shiori Suga



交流会



バス見学会



学会総会

大学生になって
1年生の

声

有意義な時間を過ごす

大槻 賢治
Kenji Ohtuski

私が、鶴見大学に入学して、はや3ヶ月が経ちました。最初は嫌いな電車で揺られてあまり気分が優れない日々もあり、新しい生活の期待や不安が五分五分で最初は落ち着かない日々が何日か続きました。学籍番号が近い人から友達になっていき、電車も少しずつ慣れていって徐々に安定しました。大学でいちばん印象的なのは、自由な時間が持てることです。今までは、あらかじめ決められた中で生活していたので、自分のやりたいことを探したりするのが難しかったですが、今はとても探しやすい、有意義な時間が持てます。

現在、ドキュメンテーション学科の授業ではコンピューターの基礎を学んでいます。コンピューターをよく知らない人や使い方が分からない人でも大丈夫です。私は、決して得意な方ではありませんが、問題なく授業について行っています。タイピングの練習も家で毎日しているのでとても上達し、打つ早さが増しました。

先生方は面白く、講義の雰囲気にもそれぞれの先生で特徴が出ています。興味を誘われる講義をしてくださるので学習している感覚とはすこし異なり、自分が好きなことをしている時間のように感じられます。

今後は、もっとコンピューターに触れて自分の能力を向上させていきたいと思います。また、教員免許を取得したいので、そちらの勉強もしていきたいです。

鶴見大学に入学して良かったと思います。ここで自分の将来の目標を叶えられるように、日々鍛錬をし、それと同等に遊ぶことに一生懸命になろうと思います。

何よりも楽しい

大友 すみか
Sumika Otomo

高校を卒業し大学に入学して、長いような短いような1年生の前期が終了した。あっという間に感じるが、高校を卒業したのが随分と前のことのように感じるのだから不思議である。

電車を乗り継ぐ2時間の通学時間にもようやく慣れた。いまだに慣れないことと言えば朝の通勤ラッシュの電車とテストくらいである。高校と大学では成績の付け方が根本的に違う。授業によってばらつきはあるが、とにかくテストやレポートの比重が高すぎるのだ。私はいまだにそれに慣れないのだ。たとえ授業が無遅刻無欠席無早退であってもテストで点数を取れなければその単位は落とすことになると思った時は、納得がいかないと思った。しかも苦手な必修科目に限ってテストの比重が高いのだ。そのためテスト前は、高校時代からは考えられないほど必死で勉強した。必要だからという理由でやったこととはいえ、勉強の観点からみても大学の前期は高校とは段違いに濃かった。卒業前の高校時代が薄れるはずである。毎日が勉強と部活と遊びとアルバイトで過ぎていく。これを充実した日常と呼べるならば、これ以上ないほど充実した毎日もないだろう。

7月28日に前期の授業のテストが全て終了した。これで前期は終了したのだが、感想としては、長いようで短かったが何よりも楽しかったと唯それである。数か月しか経ってはいないが、小学校から大学までの全ての学校の中で一番楽しいのは大学であるという噂は本当だったのだと実感した。

1年生の声



いろいろなことにチャレンジ！

学生の



3年生・勉強とクラブ活動

大学生活というものは本当にあつという間で、もう就職活動が始まる年になりました。同時に硬式野球部に入部してからも3年が過ぎ、勉学や部活動に追われる毎日です。

去年6月28日に、横浜スタジアムで“開港150周年”を記念して、神奈川社会人選抜 対神奈川大学選抜による野球フェスティバルが開催されました。私は神奈川大学選抜チームに選抜していただき、試合にも出場することが出来ました。私自身、選抜していただいたことだけでも満足でしたが、まさか先発で出場できるとは思ってもなく、本当に記念になりました。

学生課の方々や入試センターの方々、他にも、ドキュメンテーション学科の先生方、野球部の先輩・後輩から、「頑張ってきて来い」や「絶対打てよ」など、応援のお言葉をいただいたこと本当に感謝しています。

勉学と部活動の両立というのは大変ですが、この2つに追われる日々は学生のうちにしか出来ないことだと私は思っています。部活や家業の手伝いに没頭していた夏休みが終わり、また勉学にも追われる日々です。そういう中で、苦手なことや自分に合わないことなどを簡単に諦めてしまったり、投げ出してしまうたりするのは、非常にもったいないことだと思います。一度やろうと決めたことを最後までやり通すことの難しさはあると思いますが、やりきったときの達成感を味わうまで、残りの大学生活、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思っています。

南橋 大輝 (写真右)
Daiki Minamihashi



インターンシップ報告会



(上段左より) 半沢・奥村・磯野・吉田・高野 (下段左より) 折笠・清水・菊川

寺島・登尾

今年度もインターンシップへ10名の学生が参加しました。実習後の10月26日にはインターンシップ報告会を開催しました。新型インフルエンザの影響で、当日2名の学生が会を休まなければなりませんでした。全快を待つ後日2名のための報告会を開きました。

事前指導、実習、事後指導、そして報告会を経て、学生たちはめざましい成長を遂げました。今後の学科の学習、就職活動にインターンシップの経験を余すところ無く活かしてもらいたいと思います。

今年度学生たちがお世話になりました企業は10社の企業(五十音順・括弧内は実習生)です。誌面上ではありませんが、ご協力に深甚の感謝を申し上げます。

株式会社IHIテクノソリューションズ [菊川 知加子]
長田電機工業株式会社 [高野 敏之]
神奈川県トヨタ自動車株式会社 [登尾 麻鈴]
株式会社志正堂 [磯野 慈武]
株式会社西田書店 [奥村 斉亮]

株式会社一蔵 [寺島 あおい]
神奈川新聞社 [折笠 真由子]
株式会社紀伊國屋書店 [清水 杏子]
株式会社ソフテム [吉田 直貴]
株式会社富士通ワイエフシー [半沢 秀憲]

- ◆インターンシップはとても良い経験になりました。お客様との会話がとても楽しく、接客業やサービス業に興味を持つようになりました。そして、これからも色々チャレンジしていこうという意思が生まれたと思います。(登尾)
- ◆15日間の研修期間で様々な知識を得ることが出来た上、非常に貴重な体験をさせていただきました。興味のあるソフトウェア開発の現場に携わる事ができ、とても有意義のあるインターンシップとなりました。(吉田)
- ◆社会人としてのマナーはできているのか、社会はどんなところなのか知りたいと思いインターンシップに参加しましたが、他大学の実習生と話せたり、就職活動をより身近に感じるようにできたり、予想外の成果がありました。
- ◆担当してくださった方々からは、「真面目で積極的」「仕事が丁寧で早い」「大きい声で挨拶が出来る」「自分のすることを理解して動ける」と概ね好意的な評価をいただきました。また、「笑顔を前面に出すこと」「字をきれいに書くこと」などの改善点もご指摘いただきました。(奥村)
- ◆若さに欠ける発言をするというお言葉をいただきました。冷静に物事を見過ぎて淡々としていると受け取られがちなので、今後はもう少し明るく、楽しそうに振る舞うよう心がけたいと思います。(寺島)

❖ 情報メディア学会研究大会に参加して ❖

4年 市村 希

Nozomi Ichimura

四年生に進級して落ち着いた頃、本学科の元木先生から、以前関わらせて頂いた研究の発表を情報メディア学会の研究大会で行う旨を聞かされました。「消費者教育における疑似体験学習教材の作成と評価」という附属高校と連携して行った研究で、一緒に研究を行った同学科の亀岡さん、附属高校の小原先生を加えた四人の連名での発表ということでしたが、紆余曲折の結果、その代表として私が発表することになりました。

研究発表をすることが決まってから、参加申請、原稿の提出、発表用スライドの作成など、元木先生、亀岡さんと共に準備をしました。研究大会まで日数があまり無い中での作業だったため、準備期間の記憶はあまり残っていません。

情報メディア学会研究大会当日、初めての場、初めての体験で終始緊張し続けていましたが、発表は練習通りとはいかなかったものの、無事に終わらせることができました。その後行われた交流会では、発表を聞いた方から内容についての質問を受けたり、関連したお話をして頂いたり、改めて今回行った研究について考え直すことができました。

今回、初めての研究発表で戸惑うことは多々ありましたが、ただ学生生活を送るだけでは経験できない、貴重な体験をすることができました。このチャンスを与えて下さった元木先生には非常に感謝しています。今後、研究発表で得られたことを生かし、卒業するに恥じない卒業論文の執筆に取り組んでいきたいと思えます。

追悼

渡邊苑子さんの夭逝を悼む

平成20(2008)年9月3日、ドキュメンテーション学科3期生の渡邊苑子さんが、21歳3ヶ月の短い生涯を閉じられました。本来であれば、この3月、同期の仲間たちと一緒に卒業していくはずでした。

ドキュメンテーション学科教員、実習技術員、学生一同、ご冥福をお祈りします。

ドキュメンテーション学科准教授 元木 章博

渡邊苑子さんとの思い出は、彼女が入学する前、2005年の秋から始まります。本学の受験相談を受けている時、笑顔で話している彼女が印象的でした。実際、2006年4月に本学科3期生として再会しました。入学後すぐに、お昼ご飯をご一緒することがあり、言葉少なに「この学科に入ることができて良かった」ということを言っていました。何気ない言葉でしたが、今になって思えば、彼女の言葉には一つ一つ重みがありました。近々、彼女の墓前に伺いたいと思っています。

4年 阿左美 美穂

渡邊苑子さんは、穏やかで繊細な人でした。学校では気が付くと傍に居て、私たち友人をいつも笑顔で見守ってくれました。一緒に居た時間は短かったですが、とても充実していて楽しかったです。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

平成 21 (2009) 年 4 月 – 平成 22 (2010) 年 3 月

ドキュメンテーション学科・学会活動報告

4月4日(土)

平成21年度入学式

新入生84名がドキュメンテーション学科に入学しました。8日にノートPCのが各自に貸与されました。



4月25日(土)

印刷博物館見学会

恒例の印刷博物館(東京・飯田橋)への見学会を開催。さまざまな展示物に刺激されて、今後の学科の専門科目にいっそう期待が高まったのではないのでしょうか。

7月11日(土)

ドキュメンテーション学会総会・交流会を開催

昨年度の活動報告と会計報告なされ、そして今年度の事業計画が承認されました。総会終了後は学食で交流会を開きました。1年生にとっては、先輩たちと知り合う良い機会だったでしょう。



9月5日(土)

第7回デジタルライブラリー国際セミナーを開催

シンガポールのNanyang Technological University(南洋理工大学)、ヒューマニティ・アーツ社会科学部副学部長のSchubert Foo教授をお招きし、「シンガポールにおける学術・公共図書館の現状と図書館員の養成」と題する講演をしていただきました。

2月2日(火)

コース説明会を開催

3コース制になってはじめてのコース選択です。2年生は4月までの間、自分の適性を見極めて、進むべきコースをよく考える必要があります。

2月4日(木)

バス見学会を開催

自分たちが通学する町をよく知ろうということで、鶴見大学の施設と横浜市内の図書館や庭園をバスで巡回見学しました。附属高校や女子寮では充実した設備に驚き、三溪園では豊かな自然に癒され、県立図書館では知的好奇心をくすぐられました。少し駆け足での見学だったことは残念ですが、皆さんには機会を見つけて、もう一度訪れてもらいたいと思います。



※活動報告の詳細は学科ホームページ(<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/docu/>)でご覧になれます。

■第9号お届けします。大幅に遅れての刊行です。執筆者の皆様にはたいへんご迷惑をおかけしました。来年度はこれまで同様年2回の刊行を目指します。原稿・掲載写真を募集しています。ご協力ください。

■編集委員

〔学生〕^{2年}水島 康・^{1年}山内悠加・稲垣康寛・中島史織

〔教員〕岡田 靖・伊倉史人

ドキュメンテーション 第9号

平成22(2010)年3月15日(月)

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会
横浜市鶴見区鶴見2-1-3(〒230-8501)

☎045(581)1001(代表)発行責任者:原田 智子

<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/docu/>